

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	石井有美子
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 西岡 伸紀 副主査：（岡山大学教授） 伊藤 武彦 委員：（岡山大学教授） 上村 弘子 委員：（兵庫教育大学准教授） 岡本 希 委員：（兵庫教育大学准教授） 小田 俊明
3. 論文題目 小学校高学年の身体に関するセルフエスティームの育成	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 石井有美子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和1年7月27日（土） 14時00分～14時40分 場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 演習室3 1. 学位論文の構成と概要 学位論文の構成は次の通りである。 第1章 序論 第2章 小学校5年生を対象としたセルフエスティーム育成プログラムの評価 第3章 小学生の発育に対する態度の尺度の開発 第4章 発育に関する肯定的態度の育成を目指す小学校4年生を対象とした指導の評価 第5章 総合考察 第1章では、研究の背景及び目的について述べた。児童のセルフエスティームの育成が重要視されているが、その指導改善には評価研究が不可欠である。セルフエスティームの育成については、自尊源を考慮することの有効性が指摘されており、小学校体育科の身体領域におけるセルフエスティームの育成（「発育・発達」の指導）に関する評価研究は重要であるものの、ほとんど認められない。その一因には、評価のための尺度が開発されていないことがある。そのため、本研究では、小学校高学年の身体領域のセルフエスティーム育成に関するプログラム及び評価尺度を開発し、プログラムの評価を行い、身体に関するセルフエスティーム育成の指導内容及び指導方法を提案することを目的とした。 第2章では、小学校においてよく実施される「よいところみつけ」のプログラム開発と評価について述べた。すなわち、小学校5年生を対象に6時間構成のプログラムを開発、実施し、プロセス評価、及び前後比較によるセルフエスティームに関する効果評価を行った。その結果、事前調査においてセルフエスティームが低い児童には効果が示唆された。また、セルフエス	

イームが低い児童は「よいところみつけ」の記述に対して消極的傾向にあることが明らかになり、個別の支援が必要と考えられた。

第3章では、セルフエスティーム育成の自尊源として身体領域を取り上げ、身体領域のセルフエスティーム育成の評価尺度の開発について述べた。すなわち、小学校4～6年生を対象として、身体の発育に対する態度の尺度を作成し、信頼性及び妥当性を検証した。その結果、「体型に関する否定的な感情」「体型に関する肯定的な感情」「他者との比較」「体の変化に対する受け止め」の4因子から成る尺度を開発した。態度の性差・学年差については、男子の方が女子より肯定的であり、女子では高学年ほど否定的になる傾向が認められた。また、態度は自尊感情や自己肯定感と関連することから、指導において、セルフエスティーム育成と関連づけることの有効性が示唆された。

第4章では、小学校4年生を対象に、発育に対する肯定的な態度の育成を目指す6時間のプログラムを準実験デザインにより実施し、開発した評価尺度を用い効果を測定した。その結果、「体型に関する肯定的な感情」について効果が認められた。また、事前において「体型に関する肯定的な感情」が低い児童において特に効果的であることが示唆された。一方、「他者との比較」や「体の変化に対する受け止め」においては効果が認められなかった。その結果を踏まえ、プログラム改訂のためには、メディアの影響への対処、他者との比較に関する指導内容の改善が必要と考えられた。

第5章では、各章の研究を概観した後、保健教育におけるセルフエスティーム育成プログラムの内容、及び育成の留意点について述べた。育成において目指すべきは、身体の外見に対する否定的評価を直接的に改善することではなく、自分の体に対する否定的な感情を緩和し、生活の質を損なわないように援助を行うこと、そのためには、セルフエスティームの高低のみならず、その低下に関わる背景要因やセルフエスティームを支える領域（自尊源）にアプローチすることの有用性が示唆された。

2. 審査経過

審査に先立ち、13時00分～13時50分に公聴会を行い、審査委員全員が論文の発表を聴講し、質疑応答が行われた。その後の審査会では、以下の点について、質疑応答、協議が行われた。

(1) 論文の独創性

本論文の独創性は、身体領域のセルフエスティーム育成について、評価尺度を開発し、同尺度を用いてプログラムの効果評価及びプロセス評価を行ったことにある。評価研究として、現実に実施可能な範囲で評価デザインが計画されていること、効果は一部の因子に留まったが、効果評価、プロセス評価ともに綿密に分析されていることが高く評価された。一方、日本の青少年のセルフエスティームが低いことの原因、尺度開発における再テスト法の未実施、及び研究の限界について、記述の充実が求められた。

(2) 論文の発展性

本論文は、綿密なプロセス評価により、開発されたプログラムの特徴や有効性の確認、及び課題改善に多くの知見を提供していることから、研究規模の拡大など、研究の今後の発展性が期待された。ただし、今後の研究に関して、セルフエスティーム低群におけるプログラムによる発育態度の向上について、目指すべき到達レベルの明確化が要望された。また、倫理上制約されるものの、身体領域のセルフエスティーム育成における二次性徴の影響の検討、効果評価とプロセス評価の各データの連結化についても要望された。

(3) 学校教育の実践への貢献

本論文は、身体領域におけるセルフエスティーム育成の効果評価及びプロセス評価について報

告した数少ない研究であり、小学校保健教育における発育・発達に関する教育実践に貢献したことが高く評価された。また、評価結果を踏まえ、同指導及び「よいところ見つけ」の指導に対して、具体的な改善案を提案したことが評価された。一方、発達障害のある児童に対する指導の工夫、及びプロセス評価に関わる同児童の記述方法等の改善の必要が指摘された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 石井有美子 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。